

サービス変革の波、次は自動車産業の番へ

商品企画第一部シニアマネージャー 千葉直史氏に聞く

期待される「MaaS」による市場インパクト

■大きな潮流、モノからサービスへ
既存の産業やサービスが劇的な変化を遂げる時、株式投資の面でも注目すべきタイミングであることが多い。例えば、フィーチャーフォン(ガラケー)からスマートフォン(スマホ)への変化。スマホへの進化はその端末性能の向上も素晴らしかったが、真の意味での大きな変化は、アプリやeコマース(電子商取引)、モバイル決済など多様な巨大市場が誕生・拡大したことである。結果的にはハードウェアとしてのスマホの上に、さまざまなソフトウェア市場が拡大し、スマホ誕生以降、多くのアプリ開発企業や関連サービス企業の事業規模や株式時価総額は飛躍的に成長した。

ハードウェアからソフトウェア、モノからサービスへの流れは、これまでも、またこれからもあらゆる業界でこれから起こるだろうが、次に本格化するのが自動車産業の番かもしれない。従来、車体製造メーカー、またはテクノロジー企業と認識されている企業の一部は「ヒトやモノの移動」をサービスとして提供する企業へとシフトしていく可能性がある。

■なぜ「MaaS」(マース)に着目したか

「グローバル・モビリティ・サービス株式ファンド(1年決算型)」は「サービスとしてのモビリティ=MaaS」を投資機会としてとらえる事を目指すファンドだ。電気自動車(EV)単体や自動運転車単体ではなく、「MaaS」に着目した理由はいくつかあるが、将来的に自動運転車の販売高より、「MaaS」ビジネスのマーケットの方がはるかに大きくなるというアーク社の予測もその1つだ。自動運転車の車体価格は一般車より高くなる可能性が高いとみられ、主な購入者はタクシー会社やレストラン、食品販売業、オフィスなどさまざまなサービス提供事業者になる公算が大きいとアーク社は考えている。自動運転タクシーもそうだが、自動運転車のシェアリングや自動運転バスの使用などで交通のさらなる効率

化が図られるだろう。そうした場合、ハードウェアとしてのクルマがどれだけ多く販売できたか以上に、MaaSサービスがどれだけ多くの人に利用してもらったかということの持つ意味のほうが大きくなる可能性がある。

■「MaaS」の観点から新しい銘柄分類

株式の銘柄分類としては、いわゆる業種(セクター)別が一般的であるが、「グローバル・モビリティ・サービス株式ファンド(1年決算型)」において、アーク社が考えるMaaSカテゴリー分類は違う。

大きく5つに分類しており、まず1つ目は「MaaSプラットフォーム」。地域や交通事情に即した自動運転技術を提供している企業、特に自動運転部分の運行システムを提供する存在で、自動車メーカーやIT企業などが中心になると考えられる。自動運転システム提供とともに安全な運行を担保する存在として継続的な収益を得ることが予測される。従来の自動車会社は中古市場やメンテナンス事業を除くと車体売り切り型のビジネスであるが、MaaSの世界では販売後も継続的な収益を獲得する存在になると予想している。車体を販売せずにリースのような形式でフィーをとるなどのビジネスモデルもあるかもしれない。人々が日々の生活で負担するインフラに対する費用のようなかたちで、収益を得ることが期待される。

2つ目は「BtoB MaaSプラットフォーム」。広義の「MaaSプラットフォーム」の一部であり、ドローンや自動運転トラック、自動運転の農機や建機のような専門車両の自動運転機能を提供する企業達だ。

3つ目は「主要部品開発」。自動運転を達成するためには欠くことができない存在であり、高い付加価値を有する部品・素材・半導体メーカーなどが中心となる。

4つ目は「車体製造」で、自社で車体製造能力を持たない非製造業のMaaSプラットフォーム向けに車体を開発



・製造するメーカーである。今後の技術開発スピード次第では将来的にMaaSプラットフォームとなる可能性を秘めた企業も含まれよう。

最後は「MaaS活用ビジネス」。タクシーや外食、小売、ホテル、オフィススペースなど、MaaSプラットフォームが提供する自動運転車両上で多様なビジネスを展開する企業、または増大する移動需要から恩恵を受けられるコンテンツ企業などが考えられる。

■現在の株式市場はMaaSのインパクトを過小評価か

MaaSという新たな産業は、認知が急速に広がっているとはいえまだ新しく、現時点では将来の成長ポテンシャルが必ずしも株価に評価されていないと考えられる。ただ、今後MaaS事業で大きな成長が期待できると市場が認識し始めた瞬間から株価の居所は大きく変わっていく可能性が高いと考えている。

■アークのプロフィール

当ファンドの助言会社であるアーク・インベストメント・マネジメント(本社はニューヨーク)は、テクノロジーと「破壊的イノベーション」にのみフォーカスする極めてユニークな運用会社だ。金融業界出身者は少なく、社員の多くがシリコンバレーのテック業界などの出身者。普通のアナリストは決算を読み、そのバリュエーションで株価を評価するが、アークは大企業でもまだ財務諸表に表れていない戦略に着目、その将来の収益のインパクトから今の株価を見る「ベンチャーキャピタル」の視点を有している。当社は2017年にマイナー出資を行い、連携を強化している。